

## 住信SBIネット銀行株式会社



# 勘定系システムの社外連携や 行内業務システム構築の迅速化など APIの高度利用を加速

インターネット専門銀行の住信SBIネット銀行株式会社(以下、住信SBIネット銀行)は、2007年の開業からの約9年間で口座数270万口座、預金総額4兆円(SBIハイブリッド預金1兆4,000億円を含む)に到達するなど、事業を拡大してきました。そして次の成長へのステップとして照準を定めているのが、多彩な社外のアプリケーションとの連携です。

顧客がユーザーIDやパスワードなどを他社に預けることなく、口座残高や取引などのデータを社外のアプリケーションからシームレスに利用できるようにするため、日本の銀行として初めてAPI(Application Programming Interface)の接続に乗り出しました。その第一弾として実現したのが、株式会社マネーフォワード(以下、マネーフォワード)との提携による自動家計簿・資産管理サービスアプリ「マネーフォワードfor住信SBIネット銀行」です。この実績は、FinTech領域の先進企業という住信SBIネット銀行の評価を高め、APIのさらなる高度利用に向けた取り組みを加速させています。

## マネーフォワードとの連携を契機とし 勘定系システムのAPI接続へ動き出す

2007年にインターネット専門銀行として開業した住信SBIネット銀行は、「どこよりも使いやすく、魅力ある商品・サービスを24時間・365日提供するインターネットフルバンキング」の実現に努めてきました。その後も最先端のテクノロジーを積極的に取り入れながら、時代の先を行くサービスを次々に打ち出しています。

例えば新たな法人向けサービスとして2016年10月、ビッグデータを活用した融資スキームのもと、提携先サービス上で発生する顧客の日々の取引データをリアルタイムに融資審査に利用する、中小企業向け事業性融資サービス(トランザクション・レンディング)「レンディング・ワン」の提供を開始。その第一弾として、提携先のクレジットカード決済サービスを利用している法人加盟店に向けた融資サービスの提供を開始しました。

また、個人向けサービスの強化に向けても、ディープラーニング手法を活用したデジタル・マーケティングの実証実験、AI(人工知能)とGIS(地理情報システム)などの統計データを活用した先進的なローン審査手法に関する実証実験などを開始しています。

そして、デジタル・トランスフォーメーションが加速する中で新たな銀行のあり方を体現すべくチャレンジしているのが、APIエコノミーのトレンドに乗ったFinTechへの取り組みです。2015年8月に新設した「FinTech事業企画部」を中心に、他の金融機関を凌駕する新サービスの開発推進を目指しています。

きっかけとなったのは、マネーフォワードとの業務提携です。同社が提供している個人向け家計簿・資産形成アプリ「マネーフォワード」は、複数の異なる銀行やクレジットカード会社をつなぎ、利用履歴や残高などのデータを横断的に取得することで、お金の流れを自動でグラフ化します。食費や光熱費などの支出を自動で分類するといった機能も備え、すでに利用者は400万人を突破(2016年

9月)しています。

住信SBIネット銀行は、日本の銀行として初めて勘定系システムをAPIで接続し、顧客がこのマネーフォワードのサービスをより安全に利用できるインターフェースを整えました。こうして実現したのが、「マネーフォワードfor住信SBIネット銀行」です。

住信SBIネット銀行の執行役員でありシステム開発第2部長を務める木村美礼氏は、このAPIの開発に至った経緯を次のように話します。

「わたしたちはAPIエコノミーやFinTechといったキーワードが世間で騒がれ始める前から、銀行内外のシステムをAPIで疎結合に接続することでビジネスの環境変化に柔軟に対応し、新たなサービスを迅速に生み出すことができるITインフラを実現できないかと考えていました。そこに持ち上がったのがマネーフォワードとの提携でした。優れたアプリケーションとの連携により、お客様に



住信SBIネット銀行

住信SBIネット銀行株式会社

東京都港区六本木1-6-1 泉ガーデンタワー18階  
<http://www.netbk.co.jp/>

2007年9月の営業開始以来、「どこよりも使いやすく、魅力ある商品・サービスを24時間・365日提供するインターネットフルバンキング」の実現を目指し、インターネットの利便性を最大限活用した魅力ある金融サービスの開発・改善を進めています。FinTech事業領域においても、ブロックチェーン技術の利活用に向けた実証実験や、API接続サービスを開始するなど、積極的な取り組みを進めています。



住信SBIネット銀行株式会社  
執行役員 システム開発第2部長

**木村 美礼** 氏

新たな価値を提供することが可能となります。ただ、弊社としてはセキュリティーの観点から、お客様のユーザーIDやパスワードを他社に預けることには大きな懸念がありました。一方でマネーフォワード側も同様に顧客情報を自分たちが管理することは避けたいと考えていました。そんな両社の思いが一致する形で今回のAPI開発のプロジェクトがスタートしました」

### スクラッチ開発しかないと覚悟を決める中 IBMから提案された2つのソリューション

マネーフォワードをはじめ将来的に多様なFinTechサービスと連携し、必要なデータをセキュアな方法で渡せるようにするためには、先に述べたバックエンドの勘定系システムのほか、その周辺のさまざまな業務システムやフロントエンドのWebシステムの相互接続を担っているEAI (Enterprise Application Integration) に対しても、同様のAPIを提供する必要があります。

問題は、そうした対外向けインターフェースをどうやって実現するのかということです。先に述べたように日本の金融業界としては前例のない取り組みであり、住信SBIネット銀行は当初、「自分たちでスクラッチ開発するしかないだろう」(木村氏)と覚悟を固めていました。

しかしながら多様なFinTechサービスとの連携を可能とするインターフェースを実現するためには、ユーザー認証基盤との接続、API公開、メッセージ変換、プロトコル変換など煩雑なプログラムの作り込みが避けられず、入念なテストも必須となります。このすべてをゼロからスクラッチで対応するとなれば、サービスインまでに膨大な工数と時間を費やしてしまいます。

そんなときにIBMから提案されたのが、「IBM API Connect」(以下、API Connect) と「IBM DataPower Gateway」(以下、DataPower Gateway) の2つのソリューションです。

API Connectは、オンプレミス環境およびクラウド環境の両方でAPIライフサイクル全般を管理



し、APIの作成、実行、管理、保護などの機能をGUIで提供します。これによりスピーディーな開発と統合的なサポートが可能になります。DataPower Gatewayは、APIをはじめモバイル、クラウド、Web、サービス指向アーキテクチャー(SOA)、企業間(B2B)のワークロード間のアクセスの保護、統合、最適化を実現する専用アプライアンス型のプラットフォームで、OAuthをはじめとするセキュリティーや制御などの外部企業との連携に必要な機能が集約されています。

これらの機能を総合的に評価し、住信SBIネット銀行はAPI ConnectとDataPower Gatewayの導入を決定しました(図1)。

「管理画面やデモを確認したところ使い勝手も好印象でした。必要な要件はほぼ満たされていました。また、IBMの優れたサポート体制に対する安心感もあり、採用することにしました」と木村氏は話します。

### 先々の運用保守まで見据えた API開発を内製化できた

住信SBIネット銀行におけるAPIの開発作業は2015年11月に開始し、翌2016年3月に早くもマ

ネーフワードとの連携を実現しました。

同社 システム開発第1部のシニアマネージャーである吉川亮氏は、「先々の運用保守も見据えた、すべての開発を内製化できたことが最大のポイント」とし、「API ConnectやDataPower Gatewayを活用したことによる開発スピードの向上やコスト最適化の効果は圧倒的でした。仮に何もない状態からスクラッチ開発する、あるいは外部のベンダーに開発を依頼するといった方式をとっていたなら、このような短期間のうちにAPIを開発し、外部企業と接続することは不可能だったでしょう」と話します。

では、なぜ住信SBIネット銀行はAPI開発の内製化を進めたかったのでしょうか。その理由は先の木村氏の言葉にもあったように、将来的に銀行内外のさまざまなシステムをAPIで容易に接続することを目指していることにあります。マネーフワードとの連携は、その発端に過ぎません。

その意味から、API ConnectやDataPower Gatewayによる拡張性を確認することも、今回のAPI開発における大きなテーマの一つでした。

「任意の業務システムに対して、複数の接続先に異なるデータを提供するAPIを柔軟に追加できる

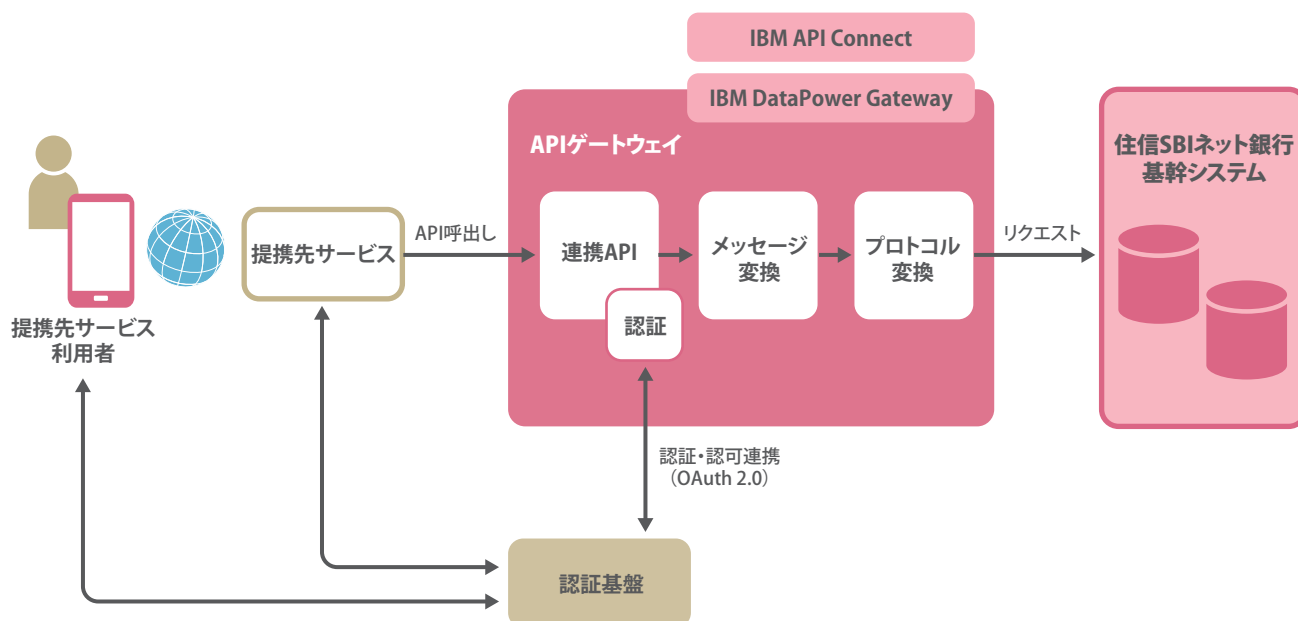


図1. 提携先企業へのAPI接続の概念図



住信SBIネット銀行株式会社  
システム開発第1部  
シニアマネージャー

吉川 亮 氏

こと。また、それらのAPIごとにデータの流量を制限するといった細かいコントロールを実現できたことも大きな成果です」と木村氏は話します。

もっとも、ここまでの過程に苦勞がなかったわけではありません。

例えば住信SBIネット銀行では、EAI配下のシステム間でXML形式のデータをMQ接続でやり取りしていますが、提携先企業が便利に使えるAPIとして公開するためには、扱うデータをJSON形式に変換する必要があります。

「この変換ルールの作成や実装のノウハウを持っていなかったため、弊社だけで実現することは困難でした」と吉川氏は振り返るとともに、「IBMが該当部分の作り込みを行ってくれたおかげで、この問題をクリアすることができました。こうしたIBMの手厚いサポート体制も、API ConnectやDataPower Gatewayを採用して良かったと思えるポイントです」と話します。

### 日本の銀行ではありえなかった 更新系APIの提供を開始

こうしてAPI開発および運用保守の体制を整えた住信SBIネット銀行は、さらに高度なAPI活用の実現に乗り出しました。2016年9月20日に株式会社ネストエッグと業務提携し、同社が提供する自動貯金サービス「finbee(フィンビー)」と住信SBIネット銀行の口座との連携を実現するものです。

これによりfinbeeのユーザーは、自分の口座の残高や入出金明細などのデータを正確かつよりセキュアに取得することが可能となります。もちろんマネーフォワードとの連携と同様に、インターネットバンキングへのログインIDやパスワードなどの個人情報もネストエッグに預ける必要はありません。

そして特筆すべきは、従来提供してきた“参照系”のAPIに加え、代表口座とその一部である目的別口座(顧客自身で口座名を付けて目標期間や目標金額を設定できる貯金箱のような口座)間での振替機能を利用できる“更新系”のAPIを新たに提供

したことです。この結果、finbee上での自動貯金機能が実現しました。

「勘定系システムのデータ更新を伴う仕組みを外部に提供することは、従来の銀行では考えられなかったことです。仮にやろうとすれば、年単位で膨大なコストを費やす巨大プロジェクトになっていたでしょう。APIを活用したからこそ嚴重なセキュリティを担保した上で、柔軟な連携を可能とする仕組みを短期間かつ低コストで実現できたわけで、まさに画期的な一歩です」と木村氏は話します。

### APIを行内にも接続することで 業務システムの開発スピードを向上

こうした実績から、住信SBIネット銀行のもとにはベンチャーを含めたさまざまな企業から問い合わせが寄せられており、同行と連携する外部サービスは、今後ますます拡充していくことが予想されます。

「預金金利やキャンペーンなどお客様の個人情報に触れない情報であれば、完全にオープンなAPIとして公開することも比較的容易です。今後は銀行サイト以外での銀行サービスの活用も考えていきたいと思います。また今後、金融庁の金融審議会から提示される法制度や枠組みに準拠し、FISCからのガイドラインに沿った形で、提携先企業に対してその場での決済やローンなどのサービスを提供するAPIについてもアンテナを広げて検討を進めていきます」と木村氏は話します。

さらに住信SBIネット銀行では、こうしたAPIを行内にも接続することで、さまざまな業務システムの開発スピードも向上したいと考えています。

「APIを接続することで、勘定系システムやEAIに直接手を入れることなく、業務担当者が使う画面を改善したり、低コストでアプリケーションの利便性を向上させたりすることができます」と吉川氏は話します。

すでにその取り組みも始まっています。「例えば最近も、ある業務部門から『入出金明細の照会デー

タに項目を1つ増やしたい』という要望が寄せられました。従来であればベンダーにRFP(提案依頼書)を提示し、提案や見積りが返ってくるのを待っている間に、すぐに1、2週間が過ぎてしまうところでした。それが現在では、照会対象のデータさえEAI側に存在していれば、APIを通じて接続するだけで即座にお客様や社内ユーザーの要望に応えることができます。実際、この要件に対応するために要した開発時間は半日程度で、しかもコストはゼロでした」と、木村氏は事例を紹介します。

住信SBIネット銀行は、「外部サービスとの連携であれ、社内システムであれ、小回りのきくAPIを上手く活用しなければ、ビジネス環境の変化やユーザーニーズの多様化に金融サービスが追従できない時代がくる」と見えています。「幸いなことに当社は、いち早くその技術やノウハウ、アイデアを取り入れることができました」と木村氏は語り、このアドバンテージを生かした果敢なサービスづくりにチャレンジしていく意向です。

